



第三部会 シニアと地域社会： 「ご近所ラボ」プロジェクト ～2019年度にみえてきたこと～



(公財)ダイヤ高齢社会研究財団
澤岡詩野

「ご近所ラボ」プロジェクト :これまでの仕掛けとは違うポイント

意識すべきは「地域」ではなく「徒歩圏・自転車圏」

➔ 「最後まで残る範囲」が本当に意味のある地域

自助、ボランティアや地域貢献などと言われると重い

➔ 特に団塊世代以降の価値観は「マイペース」

➔ 支援する側と支援される側の境界線は「曖昧」がよい

ゼロよりも「ゆるやか」でもつながりがあれば上出来

➔ いきなり活動参加やグループ立ち上げは目指さない

➔ 埋もれた閉じこもり予軍を「一歩」引き出すことがゴール

-今まで出てこない人は待っていても来ない

-これまでのような講座やサロンではなく、生活の中に
「一歩目」を仕掛ける

-地域や貢献は、本人が後から気が付けばよい

「ご近所ラボ」プロジェクト : 目指すモデル



ショッピングモール, 喫茶店,
ホームセンターなどで連続講座を
開催
見せかけは馴染みのお店が開催

住民

住民

住民

コーディネート

ゴールは地域デビュー
ではない

そこに目が向くこと!

▼ 終了後もつながれる
地元の仲間

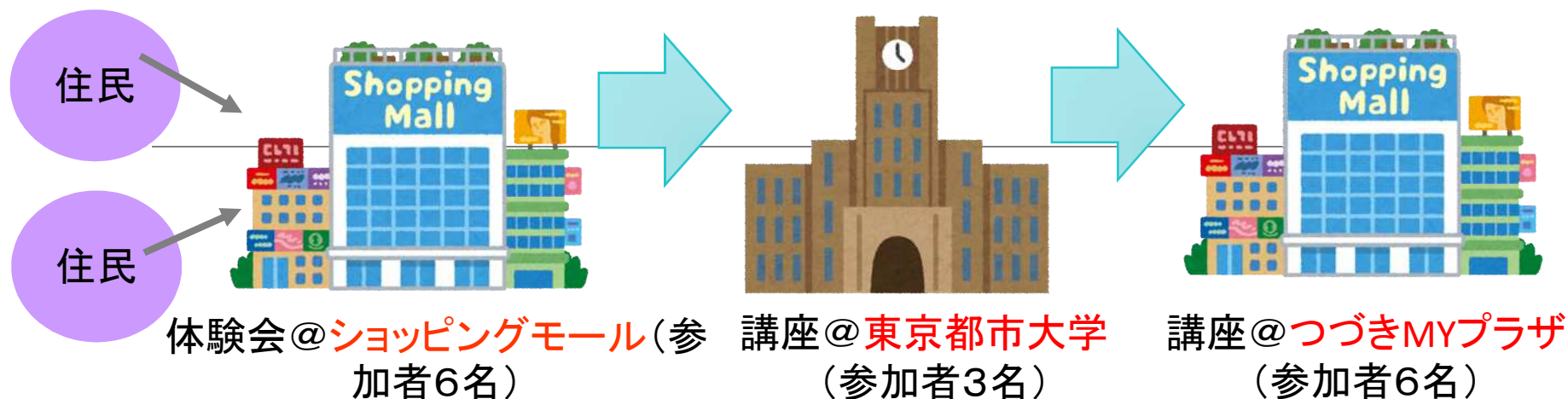
▼ 既存の講座への興味

▼ 講座主催団体で
ちよつとのお手伝い

コー
ディ
ネー
ト

講座の間に目指すのは
「小さな成功体験の積み重ね」
-外で何かを学ぶ楽しさ
-仲間がいる楽しさ
-人に自慢できる楽しさ
-地元の他の場を知る楽しさ

去年は永遠の電子工作少年，孫に自慢したいシニア男性に向け
「プログラミング講座」を実施（横浜市都筑区）



講座後3名が
ボランティアとしての
活動の継続を希望



交流会@シェアリーカフェ
（参加者4名）



講座@つづきMYプラザ
（参加者6名）※2回目

見えてきた「成果と課題」 その①

■「プログラミング」「孫に教えられる」「大学で学べる」は、男性シニアの好奇心や功名心を刺激する切り口

➡今回に実施した連続講座は入り口としては有用であるが、ここから学びを地域のカ、地域の子どもに役立てていく為に、メンターからの情報提供や誘い掛け(仲間同士の交流からの発展)や受け皿(子どもへのプログラミング教室のサポーター)を示すことが重要

■その上で「必要なこと」は、ご近所ラボで誘い込んだシニアが継続的に活躍できる場の確保

➡講座の目的は「興味を同じくする仲間や地域に目を向ける事」で、活動に結び付けるには、講座終了後に継続して仲間が集まれる場が重要

見えてきた「成果と課題」 その②

- 地域の団体のプロジェクトと連動させることで、器材、講師への謝金などのある程度の経費をある程度充当できる
 - ➡ 受講者からお金を徴収すると、関わる人の裾野を拡げることが難しくなる
 - ➡ 介護予防、孤立防止、子育て支援、市民活動助成など様々な事業を上手く活用することで、受講者からの負担を少なくすることができる

2019年度の「ご近所ラボ」

■キーワード

「スマートフォン」と「ウィンウィン」

■パートナー

-入り口となる民間企業

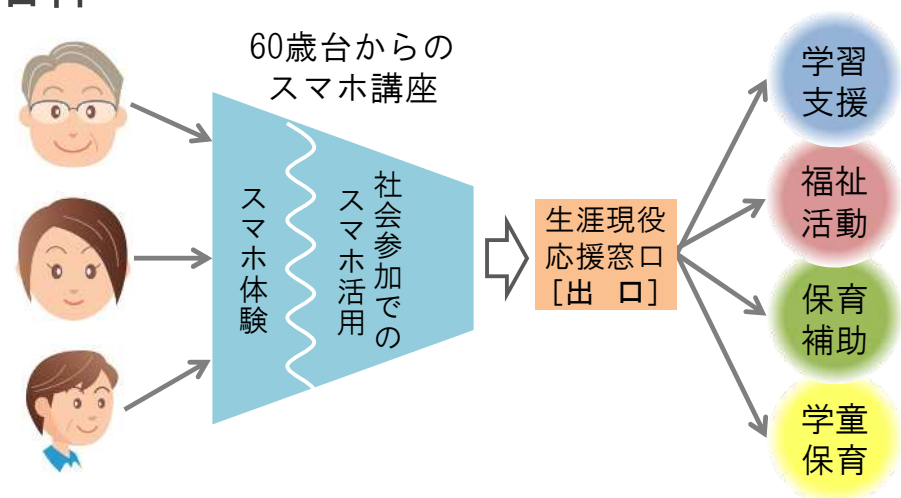
県と包括協定を結ぶ「Softbank」

➡スマホを使うシニア層のすそ野を広げることができれば利益につながる

-フィールドとなる地域，連携する自治体

生涯現役応援相談窓口などのシニアと地域について独自の事業を展開する「茅ヶ崎市」

➡地域に関わるシニアのすそ野を広げられれば地域づくりや介護予防効果も



企画の際に工夫した「ポイント」

■企画当初の目論見

- 「日常生活に出向いて行って巻き込むこと」を目的に協力を頂いたソフトバンク株式会社の店頭で開催
- 仲間づくりや地域への関心を高めるために連続講座に
- ➔「協力頂く企業の負担感」「参加する人の負担感」「可能な限り幅広い人に関心を示してもらう」ことが難しい

■工夫

- 単発の初心者向けの体験講座に
- 1日の限られた時間で地域への関心をもってもらうため「地元を知る、地元での生活を豊かにするための手段としてのスマートフォン」という視点を講座名に
- 講座内容も検索方法を学ぶ際は地元に関連する事柄を調べるなどを入れ込んだ
- コミュニティカフェとしても住民に知られる拠点で開催

講座で得られた「成果」

■20名の定員は応募開始と共にうまり、シニアのスマートフォンへの関心の高さが明らかになった。

■当日の参加者は16名で、スマートフォンを持っていない人が8割以上を占めた。

■アンケートでは、10名が「大変楽しかった」、6名が「楽しかった」と回答。

■講座をきっかけに会場となったまちづくりの拠点を知った人も少なくない。

■スマートフォンを学ぶという動機付けが地域コミュニティへの関心を高めるための大きな1歩になりえることが見えてきた。

1/1

人生100歳時代。
スマホを使って
楽しく生きる！

はじめての
スマートフォン体験

スマホを使って
まちに出よう！

令和元年12月6日(金)

【時 間】10:00~12:00 (開場 9:45)
【組 織】ソフトバンク株式会社
【会 場】まちづくりスポット茅ヶ崎(浜見平11-1 BRANCH茅ヶ崎2階)
【定 員】スマートフォンを持っていない50代以上の方20名(申込制・先着)
【費 用】無料
【申込方法】☎電話、✉メール、FAX、🌐ホームページにて
氏名、住所、年齢、電話番号を下記お申込先までお伝えください。
【共 催】ソフトバンク株式会社
【協 力】まちづくりスポット茅ヶ崎、かながわ人生100歳時代ネットワーク

お問合せ・お申込先:茅ヶ崎市企画部企画経営課
長寿社会推進担当
電 話:0467-82-1111(内線2534)
F A X:0467-87-8118
E - m a i l:kikaku@city.chigasakikanagawa.jp
URL:http://www.city.chigasakikanagawa.jp

茅ヶ崎 スマホ体験 🔍 検索

2019年度に見えてきた「課題」

- 「講座で高めたスマートフォンや地域コミュニティへの関心をいかに次につなげるか？」
 - 幅広い対象を想定した場合，多くの人を集めることが可能な反面，参加者のスマートフォンの所持状況や使えるレベル，受講動機も異なり，仲間づくりや地域コミュニティへの関与を働きかける方法も一様でない
 - ➔巻き込みたい対象を細かく分類し，働きかけ方や講座のゴール設定を考えていくことが重要
- 「地域特性にあった多種多様なカタチをいかに模索するか？」
 - 横浜市都筑区ではプログラミング，茅ヶ崎市ではスマートフォンを切り口に実施したが，全ての地域にあう形はない
 - ➔地域特性や協働できる企業や市民活動団体，対象の特性に応じた多種多様な形を模索することが求められている

2020年度からの「展開」

■「この指とまれプロジェクト」への提案

: 2019年度に行った講座をもとに、ソフトバンク株式会社が他地域でもご近所ラボ(スマホ教室によるシニアのくらしの充実化)を行うことを提案

-ソフトバンクの利点 これまでショップで開催してきたスマホ教室に来たシニアとは異なる層にアプローチでき、スマホユーザーを拡げることにつながる

-地域コミュニティの利点 公民館などの公共施設に来ないシニアにアプローチでき、地域につながるプログラムを加えることで地域参加の1歩に

■現在、パートナーとなる自治体や市民活動団体を募集中